

第8章 呑川と文化

1. 呑川と文芸作品

小関智弘の『大森界限職人往来』（朝日新聞社）という本に、その名もずばり「呑川」という詩が紹介されている。

呑川
くろい川——
——呑川
重油のよどみ
陽のひかり底までゆかず
さざなみの反射もみせぬ
のり
海苔採りの舟をうかべ

とめづなの杭は くの字にうつり
川底から ゆらりと生えた
くらげの足か

小関の友人が書いたこの詩はまだ続くのだが、いろいろな意味でかつての呑川を象徴している。まず詩が発表されたのが昭和34年発行の同人誌『塩分』であること。昭和34年には呑川は「くろい川」で「重油がよどみ」「陽が底まで」届かないような汚れた川になっていたのだ。

小関自身がこの本で「数年前までは子どもが泳ぎ、ハゼが釣れた」ほどきれいだったが、「わたしが東一製作所に勤めた昭和三十二年には、すでに川の汚れがひどくて、干潮時には黒光りする汚泥から発散する悪臭が工場のなかにまで匂っていて」と書いているように、昭和30年代前半の高度経済成長が呑川を「死の川」に落としかけたことは間違いない。

第2節の「海苔採りの舟をうかべ」も興味深い記述だ。「大森、羽田沿岸の海苔業者が漁業権を放棄したのは、わたしがまだ呑川のほとりの小さな工場にいる昭和三十八年だった」とこの本にある。

漁業権を放棄するほどだから、その数年前には工場や家庭からの汚水が海を汚し、海苔を採る環境ではなかっただろう。そう考えると、呑川にうかんでいた「海苔採りの舟」はもはや現役ではなく、役目を終えて静かに朽ち果てようとしていたのではないだろうか。

小関の『大森界限職人往来』にはこのように頻繁に「呑川」という言葉が出てくるうえ、町工場で働く労働者の様子が会話も交えてじつにいきいきと描かれている。次の文章はまるで映画『男はつらいよ』に出てくる一場面のようだ。小関が呑川の堤防に腰を下ろして、つかの間の昼休みを楽しんでいたときの話である。

対岸にピアノ工場があって、揃いの作業服を着た女工が散歩をする。キャッチボールをしていた青年がわざとボールを女工にぶつけて、黄色い悲鳴が川岸にはずむ。女工のひとりが、そのボールを川に捨てると、青年たちは岸に舫った海苔採りの舟に飛びおり、長い竹竿の先につけたたも網で、流れるボールを追う。ボールをぶつけられた女工も、ボールを捨てた女工も心配そうに堤防から体をのり出して眺めている。

「……くれるじゃんかよお」 「そったらこと……」

大田区の町工場にはたくさんの地方出身の人たちが、男も女も働いていたことが方言を通して伝わってくる。呑川がほとりで働く人々と断絶していたわけではないことも伝わってくる。

それにしても、この本からわかるのは、日本の縮図とも言える大田区がたどってきた道筋だ。

漁業で栄えた大元の川を汚したのが町工場。その町工場には多くの地方出身の人も含めて労働者が働いていた。近くには多くのアパートが建てられ、その中には海苔業者が放棄した漁業権で得た大金で作ったものもあった。しかしアパートと隣接する町工場は騒音などから「公害の元凶」と指弾され、埋め立て地の工場団地への移転を余儀なくされた。

第一次産業から第二次産業へ、そして第二次産業の町工場も呑川のほとりからは消えつつある。今では川に汚水は流れなくなったが、上にあげたような労働者と川との触れ合いも見られなくなったように思える。

次に呑川のほとりのアパートに居を構えた女性詩人のエッセイがある。詩人の名は石垣りん。銀行員として定年まで勤務するかたわら、詩を作りつづけ、詩集『表札など』に収められた「シジミ」「くらし」などの詩で知られている。人が生きていくうえでのやりきれなさや悲しみを、わかりやすい言葉で綴った詩人である。

彼女が『**焔に手をかざして**』(筑摩書房)というエッセイ集の冒頭に収めたのが、「呑川のほとり」だ。少し長くなるが、引用してみる。

あと五、六年もすれば会社をやめなければならない、という年の暮れ。そこに建つはずのアパートの絵図をたよりに、夕暮れの建築現場を見に行っただ。風のつめたい日で、ついてきた下の弟が「お姉ちゃん、さびしい所だね」といった。(中略)

大田区南雪谷一丁目、退職金で完済できるかどうかの瀬戸際にたつはずのスミカであり、檜山へゆくおりんばあさんを思えば、町名の雪谷はりんがたどりつくに恰好の場所かも知れなかった。(中略)

アパートの横を流れる川を呑川といい、引越して来た当初はよく氾濫した。その水位のあがりさがりを、夜通しとっては嘘になるが、三階の窓から目をこらして見ていたこともある。治水工事がどうやら完了したのはついこの間のこと。川幅を少しひろげ、川底までもコンクリートで固められると、この春、水の満干で、干の部分にぺったり桜の花びらが張りついていたりした。

定年退職したのが1975年なので、石垣りんが呑川のほとりに引越してきたのは70年ということになる。その頃も呑川は「よく氾濫し」、このエッセイを書いた76年夏の少し前に「川底までもコンクリートで固められ」たことがわかる。久が原に住んでいて呑川を毎日通学路にしていた私には少し意外な気もするのだが、場所によって違いがあったのかもしれない。

さらに石垣りんは「川をはさんで東雪谷、南雪谷に別れる。川を左手に見て、私の部屋からはちょうど同じ高さに、池上線の電車が土手の上を走っている。人間の頭数が、混んでいなければ数えられる近さである」と書く。

ただアパートといっても、このエッセイでは16階建てで世帯数が95と書いているから、今でいうマンションだろう。雪が谷大塚駅と石川台駅の間を走る池上線の走行音が伝わるような、呑川のほとりに、詩人は亡くなるまで住みつづけた。どんな思いで石垣りんは毎日呑川をながめていたのか、知りたくなる。

ノンフィクション、エッセイと見てきたので、最後は小説のなかで呑川が取り上げられたものを紹介したい。

松本清張の『砂の器』は映画版では、犯人が返り血を浴びた白いスポーツシャツを「この辺りのどぶ川にだっ捨てることができる」として呑川がちらりと出てくる。ただし、小説には出てこない。

佐藤正午の『ジャンプ』では、失踪する恋人が住んでいたマンションの目の前を呑川が流れている、という設定になっている。

ともに共通するのは「蒲田」という町が、起こる事件の舞台に選ばれている点だ。『砂の器』では、被害者の元巡査が死体で発見されたのが蒲田操車場。犯人は操車場にとまっている電車の車輪の下に死体を置き、顔を仰向けに寝せて、電車が動き出したら顔が潰れるように細工している。元巡査の身元がばれないように、操車場がある蒲田を犯行の舞台に選んだわけである。

『ジャンプ』の場合は、主人公が翌日の札幌への出張に「近くて便利」だという理由で、恋人が住む蒲田のマンションに泊めてもらう、という設定になっている。わざわざ主人公が泊まりに来た日に失踪しなくてもいいだろうし、そもそも一人暮らしの女性が蒲田のマンションに住むと思うだろうか、という疑問は残る。蒲田、という都会のうらぶれた街並みと「失踪」というテーマが共鳴する、と作家は考えたのかもしれない。

以上の2編同様、糸山秋子の『イツ・オンリー・トーク』という短編小説も舞台が蒲田である。まるで呑川を小説に登場させるのなら蒲田しかない、と作家が思い込んでいるようだが、逆にそれだけ蒲田という町が小説の舞台にはまりやすい、ともいえるだろう。

この『イツ・オンリー・トーク』では作家の糸山秋子が主人公の橘優子に、なにくれとなく蒲田の魅力を語らせている。なにしろ小説の書き出しが「直感で蒲田に住むことにした」である。中ほどに、こんな会話が出てくる。

「ああ、いい街ですね、蒲田。ちょっと歩いただけけど」

「でしょ。なあんか、懐かしいみたいな感じするよね」

「どことなく猥雑で小汚くて」

「そうそう『粹』がない下町なの」

大田区民としてはこそばゆい気分になるが、確かに蒲田は同じ下町でも、浅草のような『粹』がないことは合点が行く。

そして小説の後半に呑川はこのように登場する。

「鬱のときはさ、呑川んとこ歩くのよ」

うちのすぐ裏だ。汚い川だ。それでも少し涼しい風が吹く。秋の虫が闇を覆うように鳴いている。

「へっ、なんで？」

「真っ黒だから」

「川が？」

「うん」

また呑川は「汚い川」と決めつけられてしまった。しかし蒲田を舞台にしているから、仕方がないともいえる。実際に馬引橋から JR 鉄道橋のあたりはゴミが浮かんでいることが多い。それにしても「鬱のときは呑川を歩く」とは。気分がどんよりしているときに寄り添ってくれる川、と好意的に解釈したい。

この小説、ある意味で蒲田小説ともいえるもので、蒲田を知る人には「ああ、あそこか」というような描写がたくさん

出てくる。

主人公がネットで出会った男と痴漢プレイをするのは「ヨーカドーの上の古ぼけた映画館」（さすがに固有名詞は出ていないが、どうみてもテアトル蒲田である）。「タイヤ公園」は主人公と知り合いのやくざが幼稚園の頃、卒園遠足で行った場所で、「自分の最初の思い出なのだ」と言う。自殺しかけて主人公のアパートに転がりこんだところは、政治家の事務所に詰めて「区内全域走り回った」。

他の登場人物たちは、蒲田の具体的な場所で実存的な意味を見いだしているのに、精神的に不安定な主人公だけは蒲田の街をふわりふわりとさまよっている印象だ。そんな彼女が唯一実存的な意味を見いだしているのが、先に挙げたように「真っ黒」な呑川、なのである。

単に蒲田の添えものとして呑川が登場しているのではない、と私には思える。呑川がきれいになることは望みたい一方、粹でない蒲田という街並みにふさわしいのは「汚い」呑川で、だからこそ疲れた人の心を癒しているのではないだろうか。

3. 呑川河畔に工房があった「人間国宝」芹澤銈介

今、区内ではわずかに馬引橋右岸たもとのマンション Grand Eagle 西蒲田 の片隅の石碑にのみ残る芹澤銈介は世界的な染色家であった。

芹澤銈介は 1895 年（明治 28 年）、静岡市で生まれ、絵の得意な少年で、県立静岡中学校卒業後、1913 年（大正 2 年）に東京工業高等学校（現東京工業大学）図案科に入学した。同校卒業後は図案の制作・指導、手芸指導、蠟染め等を模索する日が続いた。

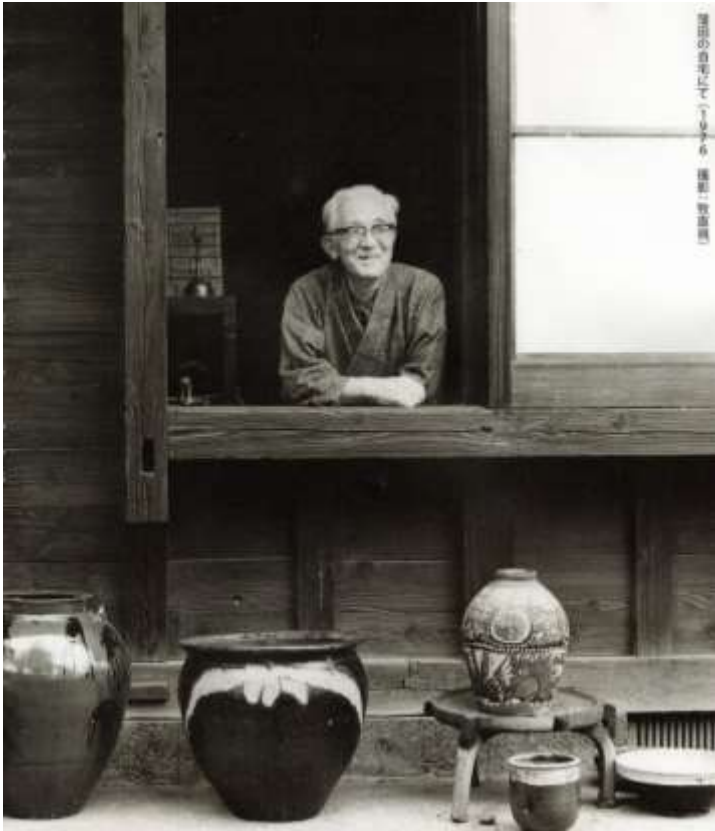
芹澤銈介に一大転機を与えたのは二つの出会いという。一つは日本民芸運動の提唱者の柳宗悦との出会いで

芹澤銈介 石碑

柳の工芸論を自身の創作信条として工芸作家の道を歩むことになる。

今ひとつは 1928 年（昭和 3 年）上野公園の日本民芸館に陳列された紅型（びんがた）に初めて接したことである。芹澤は「その模様、その色、その材料、こんな美しい楽しい染物があるのかと夢のような思いでした」と 50 年以上経った 1980 年（昭和 55 年）に感動的に語っているほどである。





「蒲田の自宅にて(1976(昭和51)年 撮影：牧直視)」

静岡市立 芹澤銑介美術館 開館40周年
記念展「芹澤銑介の日本」チラシ

1929年(昭和4年)国画会に初めて蠟染の作品「紺地杓子菜文麻地壁掛(コンジヤクシナモニアザガバカ)」を出品し、N氏賞、翌1930年(昭和5年)には型染の作品10点を出品、国画奨励賞を受賞した。このころから柳宗悦の評価もあり、工芸作家としての足場が固まりつつあった。

そして1934年(昭和9年)、芹澤39歳の時、現在の大田区西蒲田4丁目20-15の地に一家揃って移住し住居と工房を構え初めて十分な仕事場に恵まれることとなったとい

う。その後、芹澤は88才で亡くなる1984年(昭和59年)までのほぼ50年間、戦災で離れることはあつたが、人生の大半をこの地で制作活動に打ち込んだ。

その間の主な歩みを記すと次の通りである。

- 1937(昭和12)年 アメリカ人カール・ケラーの依頼による合羽摺手彩色の手法での「絵本 どんきほーて」
- 1939(昭和14)年 沖縄・那覇の形附屋から紅型の技を受く
大阪阪急百貨店で初めての個展
- 1949(昭和24)年 女子美術大学教授
- 1952(昭和27)年 静岡県立女子短期大学教授
- 1955(昭和30)年 芹沢染紙研究所を設立し、後進の指導
- 1956(昭和31)年 人間国宝に指定
- 1963(昭和38)年 大原美術館の板画・染色館(棟方・芹沢館)落成
- 1967(昭和42)年 静岡市名誉市民となる
- 1976(昭和51)年 フランス国立グラン・パレ美術館で「芹沢銑介展」
- 1979(昭和54)年 米国サンディエゴ市ミンゲイ・インターナショナル博物館で「芹沢銑介展」
- 1982(昭和57)年 インド・クシナガラ洲 釈迦本堂の「釈迦十大弟子尊像」制作
- 1983(昭和58)年 フランス政府から「文学芸術功労賞」を授与さる

芹沢銑介の生涯の及ぶ仕事は、型絵染による着物・帯・のれん・壁紙・卓布・掛軸・屏風・額・絵本・

装丁・挿絵・カット・カレンダー・燐票・カード・蔵書票・品書・団扇・扇子・肉質のよる板絵、スケッチ画・ガラス絵・緞帳・ステンドグラスの図案制作、建築の内外装及び家具の設計、実に多岐に渡っている。またその表情も端正なもの、無邪気なもの、コミカルなもの、稚拙のようなもの、洗練されたもの、奔放なものとはさまざまで楽しい。

作品そのものは大田区にほとんどなく 住居も工房も壊され、大田区内にはわずかに双流橋の橋銘板の文字と型絵染額「真の字」（制作年不詳）が郷土博物館に残るだけなのは淋しい。ただ作品集は太田区郷土博物館がまとめた「芹沢銈介作品展」として区内図書館に備えられているので簡単に接することができる。

（この項は 1998 年 10 月大田区郷土博物館発行「芹沢銈介作品展」に記載の北村敏学芸員「芹沢銈介のあゆみ」による）

第 8 章 呑川と文化

2. 呑川と映画

呑川と映画の関わり、といえは以前は 1974 年公開の松竹映画『砂の器』ぐらいしか思い浮かぶものはありませんでした（呑川と『砂の器』については、前著『呑川は流れる』で記載済みのため省略します）。

しかし 2016 年公開の東宝映画『シン・ゴジラ』によって、呑川といえはゴジラ、と連想するぐらいのインパクトが与えられました。

何しろ映画の中で「呑川」の字幕が入ること、二度に及びました。スクリーンに「呑川」の文字が刻印されたことはかつてなかったことでしょう。

映画『シン・ゴジラ』の時系列に沿って、「呑川とゴジラ」の関わりを見ていくことにします。

アクアライン近くの「東京湾川崎人工島（風の塔）」に出現したゴジラは映画が始まって 11 分 57 秒で呑川の「旭橋」を、係留されていた船もろとも破壊し、13 分 58 秒の時点で「呑川新橋」も破壊しています。

この二つの場面でそれぞれ「東京都大田区呑川 旭橋」と「東京都大田区呑川 呑川新橋」という文字が字幕として流れています。

「呑川新橋」のシーンで右側に大きく看板が見える「ジャック&サリーねこ病院」とは、監督を務めた庵野の飼猫の名前という話が伝わっています。実際にこのあたりの写真と映画を見比べると、同じような白い建物が実在しています。CG を使って看板の名前を変更したのだと思われます。

さらに 14 分 19 秒の時点で首相が「巨大不明生物」（まだゴジラという名前はありません）について記者会見し、「東京都大田区の呑川を遡上しております」と読み上げるシーンが出てきます。「呑川」という名前が映画で（多分初めて）発せられた記念すべきシーンとなりました。

14 分 50 秒では首相が「えっ、蒲田に!?!」と驚きの声を上げており、ここからゴジラは呑川をでて陸に上がったことがわかります。「蒲田五丁目」と見える信号で初めて、通称「第 2 形態」といわれる幼児形態のゴジラのアップが捉えられました。その後ゴジラは品川方面に移動、第一京浜国道を北上し、北品川駅では京浜急行をぶん投げています。

25分が経過したところで、品川駅の南側で東海道線をまたぐ「八ツ山跨線線路橋」に出現、ひとしきり大暴れした後、なぜか天王洲運河から忽然と姿を消してしまいました。

「八ツ山跨線線路橋」といえば1954年に公開された『ゴジラ』で東京湾から上陸したゴジラが最初に破壊した場所、として知られており、この場面は庵野監督のゴジラ映画の始祖に対するオマージュ、と捉えるべきでしょう。

鉄道総合技術研究所の小野田滋氏は「まだ東京タワーの建設前だったので、上陸したゴジラも、とりあえず目についた八ツ山橋を最初に壊したと想像されます」と書いています。

『シン・ゴジラ』におけるゴジラの足跡ですが、12分56秒の時点で映し出された登場人物のパソコンには「海老取川」という文字が見えたことから、東京湾に出現したゴジラが多摩川河口から海老取川を経由して呑川に入り、蒲田で上陸、品川に行き着いたということになります。

それではなぜゴジラは東京湾から多摩川ではなく呑川を遡上することにしたのでしょうか。

多摩川だと都心に向かいにくい、というドラマツルギー的な問題はあるのですが、大田区を破壊し尽くした「幼児形態」は足が短く、這うようにしか進むことができませんでした。やはりここは水深という点でも、呑川を選択せざるを得なかったのではないかと思われま。

『シン・ゴジラ』で最初にゴジラが破壊した「旭橋」は、呑川を象徴する橋と言っているのかもしれませんが。大田区千鳥町出身の作家・平川克美が著書『路地裏の民主主義』（2017年、角川新書）の中で、小関智弘という大田区在住の作家による『羽田浦地図』を紹介しています。この小説をNHKが84年にテレビドラマ化し、町工場を渡り歩く職人を緒形拳が演じました。

平川克美はドラマの舞台となった「呑川と海老取川と多摩川がコの字型に切り取ったエリア」を30年後に歩き、当時の様子を偲んでいます。

「緒形拳が、この町ではすでに獲れなくなった魚の名前を呟きながら歩いた場所は、大森南の旭橋あたりの呑川沿いの道であり、多摩川土手であり、あるいは糞谷の商店街である。工場の町の中を呑川がゆっくと流れ、東京湾へと注ぎ込んでいる」

『シン・ゴジラ』ほど、呑川をクローズアップした映画は今後も現れないでしょうが、蒲田はテレビドラマ（特に刑事ドラマなど）の舞台になることが多いため、点景として呑川が登場することは大いに期待できると思われま。